

精神薄弱児における自傷行為

この論文は、精薄児の自傷行為に対する、理論的基礎を与える文献を総括し、治療の基本的問題を述べ、その実際を Case-Study に示したものである。

まず、文献の考察として、Levine のネズミにおける実験、Harlow 等のサルによる実験、Paolino 等のハツカネズミによる実験等を通して、感覚的刺激の重要性を述べている。中でも Paolino によれば孤独におかれたハツカネズミが脳においてグルコースの摂取が 70% 低下することが述べられている。

また、Kulka, Fry, Goldstein 等は、運動感覚の早期における発達は母子関係に直接影響され、Solomon は、母親によって与えられた他動運動が、自動運動の発達に必要であること、Palayi は、tactile sense が他の基本的な sense に対して original なものであると述べている。また、tactile sense は最初の communication の手段であるので、これが途中で妨げられると、verbal な手段を用いることができるまで communication が失なわ

れることを示している。このような文献の考察の結果、著者は、治療の原則について述べている。このような自傷行為に対する治療計画の為には子供の新生児期と同様に胎児期の発達も知る必要がある。胎児期における刺激に対する反応は口の周囲であり、新生児期においては足のうらや手に反応がよくおこることから、これらの部位を刺激点として最初を選ぶべきであると述べている。さらに障害に応じたアプローチ、感覚刺激の重要性等の根本的原則についてふれている。

最後に、19 歳の女性に対する治療とその経過を症例報告としてまとめている。このような年齢に達していても、適切な治療によって行動を変えることができるが、早期からの、適切な刺激が必要であることも示唆している。

Haru Lemke: Self-abusive behavior in the mentally retarded. AJOT, 28, 94-98, 1974.

(横浜市大病院リハ科、作業療法士 永原美智子)

肥満患者の理学療法における心理的考察

被検者は 26 人、年齢 16~40 歳平均年齢 21 歳で若い人が中心である。これらの人は年齢、性別、身長体重、食事のカロリーによってグループを編成し、6~12 ヶ月入院して研究に参加された。

運動負荷はトレッドミル上の歩行とマットプログラムで 5, 4, 4 分間と各 1 分間の休息を入れたインターバルトレーニングである。pulse は 120~140/minute 維持できるようにコントロールされ、呼吸と循環器系が一定の状態に合わせるため最後の 4 分間は最大以下にした。

女性は美容的なことに関心を示し運動によって魅力的な身体を、男性は筋骨隆々の男っぽさをアピールできる身体を望んでいた。しかし、肥満症の人は忍耐力に欠け、物事に対しあきっぽい性格が多い。プログラムに参

加してからも偽りの理由を述べ途中棄権するものがあった。また反抗的、攻撃的性格が多く、特にプログラムの初期とか体重減少が見られない時に著しい。運動プログラムへの参加は患者に直接強制せずに肥満症患者から誘いかけた方が成功した。

メジカル及びパラメジカルスタッフの人格はしばしば肥満症患者による攻撃の対象とされるため十分考慮し対処しなければならない。

Richard A. Wunderlich, et al.: Psychologic Consideration in Physical Therapy for Obese Patients. Physical therapy, 53(7), 757-761, 1973.

(七沢病院、理学療法士 竹谷春逸)